

手先の動きと子どもの感情⑬



清水エミ子

内面からわき出る、エネルギーにおし流されている
子の、指先、手先

子どもたちが、心はずませて（積極的に）、活動している時は活動全体が動的で、表面上止まっている時にも動的感覺を相手にあたえるほどの力強い表われをしている。そんな時の指先の表われは、喜び・楽しさを伝えていることを、前回の水遊びやかけまわる活動の中で、やや具体的な面でつかむことができたように思われる。

しかし、具体的な場面、事からで、表われを見つめれば見つめるほど、私は、喜びと同時に、不安が心の中に広がってくる。
●私が具体的表われとして受けとっている事からは、心の表われではあるが、偶然的表われで、客観性のない信頼性の乏しいものではないだろうか。

●時間の流れと共に変化してゆく心を、手先、指先の表われを通してみることは、私がねらっている、心の表われを立体的につかむことに役立っているのだろうか？ そうするために何か科学的、観察順序などあるのではないか。ただ暗中模索で観察しても、同じ所を、ぐるぐるまわりをしてしまっているのではないか。そのためには何かの尺度をあてて、科学的、客観的に観察、記録しなくてはならないのではないかと、まよいで

いっぱいになってしまうのだ。こんなまよいをもったまま、私の心は、やはり、子どもたちの指先、手先の表われにすいつけられてゆくのだ。

じっと見つめていると、

ひとりひとりの子どもの、内面からわき出る力で目的をもって活動している（遊んでいる）時の指先、手先は、力強さと共に、快く、ゆるやかな表われをしていることがわかってくる。

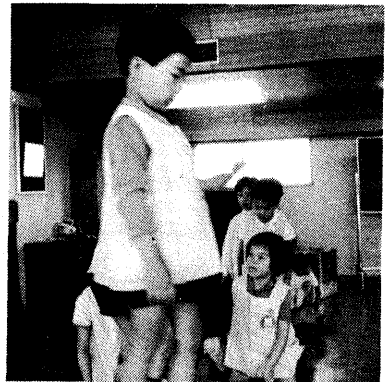
（子ども自身で、遊びに打ち込んでいる時）いわれて、さそわれて遊ぶのではなく、自分自身で遊んでいる時のようだ（自発的に）、こんな事に気づいて子どもを見つめなおしてみると、

表面は動いているが、遊び（子どもにとって意味のある活動）になっていない子どもがいることに気づいた。

エネルギーが子どもの内面から生き生きとわき出ていることがわかるのだが、その動きを見つめると、ただ衝動的に動きまわっているだけであり、生産的、建設的の行動でないことがあることを、よみとったのだ。

◎ ワーワーと声を立ててホールをかけずり回り、からだ、手が、足が、何かにふれるとそのふれた物をちょっといじって、また次の行動にうつってしまう。

ベランダを通りぬけ、またホールにもどる。ぐるりとみまわし



写真(1)

てまた動き回り、ふれたものを、ふれた所でいじる。ひろし

(写真①)

この時のひろしの指先は、ゆっくりと自然な力の入り方で、らくに気の向く所に移動している。

く手くびをつけて、指先には力がいっていない時

● ダラリとからだの横にたれさげている

● 物をいじる時も、かるくそろえた指で、あまり力をいれずにもち上げたり、動かしたりしている。（そのためおとすことが多かった。気持がはいっていないため）（写真②③）

● 動きを止めて立ち止まった時なども、からだの前で、左右の手くびを、ただなんとなくよせ合せて、指をからませている（意味なくダラリとした感じで組まれている）。

● 時々、無意識で、片手の指先を第三関節からヒクヒクと動かし、握るとも、広げるともつかぬ、表われをしていた（無意味な、どうしようかと思案しているような、開放されているような見



写真(2)

わけのつかない表われなのだ。

◎力強く、自分の

意志で動き出し遊んでいるように見えるが、遊びではなく、内からわき出る力に、自分からはじき出され、その力で動いてしまっている。りか。



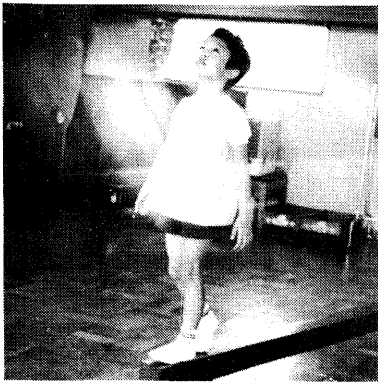
写真(3)

「ねー見て、これ水の中でブカブカしてる潜水服みたいだね」「あっ、これのぼれるよ、あたし」と箱積木にのって飛び降りる。飛び降りざまデングリがえしをし「体操の選手だ」といい、近くに

友だちにやれと指示して拒否されるが、平気で次に、室内平均台をわたり、室内用ジャングルにのぼってこしかけ、まわりを見まわしている。(写真(4)(5))

このりかの指先も、全く気らくな表われで、積木にのる時もこしや足には力がいっていたが、手先、指先はからだの横にらくにさげられていた。「デングリかえし」といって床に手をつく時だけ、指先、手先は力強く指がそろい、緊張していた。ジャングルにのる時も、平均台をわたる時も、指先の緊張は表われていず、軽くにぎられているだけだった。

こんな、男、女、ふたりの指先と行動を見つめてみて、いくつかの事項を学んだのだ。



写真(4)

内面からわきでるエネルギー、活動力を、そのまま生で行動している子どもたちの手先、指先は、快さ、楽しさはなく、ただ、ダラリと気のぬけた、表われをしている。(一見楽な表われとみまわがい



写真(5)

どっちつかず、どのようにでもよみ取れる指先、手先の表われであることに気づいた。

ひろし、りか、のような子どもは、内面からのエネルギーはありあまるほどあるのだが、それを遊びとして形づけ、生産的、建設に活動することがわからず、ただエネルギーの放出をしているだけに終わっていることがわかる。こんな子どもたちに、私(保育者)は一日も早く一刻も早く内面からわき出るエネルギーを遊びとして、形つけてあげかけ子どもが自発的に、遊びとして、目的のある、生産的な活動ができるように、方向づけなくてははいけない、とつくづく反省させられたのだ。

一学期が終わろうとしている現在(一年保育児)気づいたの

やすい) 目的意識のない時は、緊張感が全くなく、よろこびの表われもなく、ぼんやり、無気力な表われになっていることを発見したのだ。

不安でも、快い、楽しいでもなく、緊張しているのではない、

ではおそすぎる。申しわけなかったと、あせる気持ちがいつぱいになると同時に、今まで、このふたりの指先、手先もみつめていたのに、この表われをみつめることができなかったことが反省される。

成長に役立ったための活動、行動ができるようにするために、正しく心をつかまえない、よみとりたいという目的で、指先、手先の表われをみつめていたはずなのに、指先、手先の表われのみに気をとられすぎたのではないかと心が痛む。

しかし、現在の活動の中で、ひろしや、りかも、目的のある遊び、生活の充実に役立つ遊びができるように、エネルギーをつかえるよう方向づけるためには、今でもおそくはなかった。と自分をあげまして、もう一度手先、指先を見つめなおした。見つめなおせば、見つめなおすほど、いろいろのことがうきばりされてきた。

- 無気力な指先、手先は、物をよく落としてしまったり、つかみそこなったりする。

- 場や、相手の刺激に対して指先、手先の反応がおそくなり、相手とテンポが合わないで遊びにくくなる。またこの反対で、自分勝手な反応のため、早すぎて、相手のリズムに合わなくなってしまうこともある。

- 指先、手先に心が通じないためか、自分の行動にも、バラ

ンスをくずし、ころんだりつまずいたり、ぶついたりすることが多い。

指先、手先に信号がくるのがおそいため、ふつうならよろけるだけですむ所を、ボタンとからだごところんでしまったり、前から向かってくる物を手で止めたり、受けとったりできるのに、顔や、からだにもろにぶつけてしまうことが多い。

(一口でいう、おっちょこちょい、あわてもの、うっかりやさん、といわれている子どもたちではないだろうか)

いつも、くりかえしているのにしばいする子どもたちである。しかし内面からわき出るエネルギーが力強いので、劣等感や、疲労感にならず、ケロリとしているが、成長発展には役立っていないのだ。同じしばいを、ケロッとしてくりかえす子になってしまったと気づいた。

私は、ひろし、りかに、いくつかの指示をあたえてみた(遊びへの形づけ方向づけのために)。そして指先、手先の表われの変化を見つめてみた。

● 環境をととのえて、そこにさそいこみ、環境からの呼びかけに気づかせ、目的をもたせる(出合いを知らせる)。

これは、ひろしや、りかが、物や、環境への出合いを大切にすることをしらないために、どんなことにも、集中することができないのだと私はよみとったからなのだ。

★ 物との出合いを意識させるために、ひろしに示した環境

ホールに積木で駅を作り、箱車を止め、ひろしに「ここ蒲田駅なの。ひろし君運てん手さんになって一回りしてきてくれない。もしうまく一回り出来たら、先生をお客にしてよ」と話しかけ、箱車のひもをさし出してみた。

ひろし「うん、回ってくるの?」といつもの調子でひもを取ろうとし、取り落とす(指先に力が入っていない)。

ひもをひろう時だけ、やや緊張したが、無気力に、ガラガラと引っぱっていたので(出合いを意識していないと私はよみとったので)。

保「ひろし君、駅から、発車の合図をして出発してよ」といって箱車を積木の所までもどし、箱車のひもをひろしに示しておした。

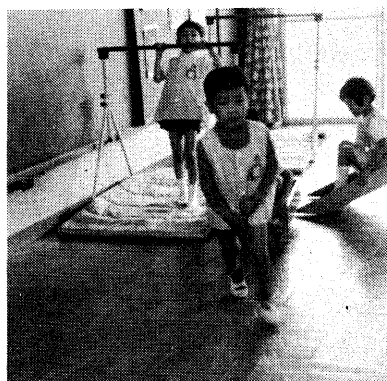
ひろしの指先は、この時はじめて力がいり、私の手のひらからひもをわしづかみにしながら

「うん、いつてくる。ピーッ発車、ゆれまーす」と声を出して、ひきまわし出した。指先、手先に力がいり、しっかりとひもをつかみ、こしの上にのせ、箱車をひき「のりますか。国電だよ」とすれちがう友だちに声をかけた。(写真(6)(7)(8))

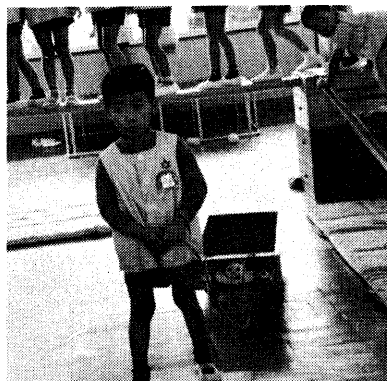
かえりは、しげるが客になって乗って来た。「はい。終点です。おりなさい」といって、ひもをもって箱車の向きをかえた。



写真(6)



写真(7)



写真(8)

その時の指への力の入れ方は、力強かった。

運転手を交替して、うしろから箱車をおす時も、力の入ったつかまり方で、指先は緊張していた。不安の表われでなく、快い表われをしていたのを、はっきりとよみとることができた。

「おい、おすぞ」といって、力を入れていた。指は五本が、かるく開いて、箱車のうしろの板をつかんでいた。

これだけの事がらで、ひろしが出合いを大切にした(意識した)と受けとめることは早すぎるが、少なくとも、今までの、目的のない、自分のからだからわき出る力そのままで動いているのではなく、何かをしよう、こうしてみよう、箱車があるのは、積木があるのは、自分が運転手になってもよいためにあるのだ

から、これを動かしてあそぼう、という出合いを感じて行動していることが、指先、手先の、快い緊張から、読みとることができた。

このように、ひろしの能力に適した、興味のあることがらをくりかえし、くりかえし、目先の変化をつけて、あたえてゆくことが大切だと感じた(いろいろの出合いを体験させる)。

★ りかに示してみた環境と助言

りかは、自分勝手に理解することが強い子なので、友だちを環境としてあたえる必要を感じていたので、

● りかのエネルギーに、負けないくらいのエネルギーをもって、表現がおだやかで、目的のある行動のできる、ともこ

を近づけてみた。

● 大きな箱に、あき箱、タイルなどを入れかえる仕事を、手伝いという形で示してみた。

保「ともちゃん、りかちゃんといっしょに、このタイルとあき箱のかたづけやってくださらない、おねがいします」

ともこ「りかちゃんとやるの？」

保「そう、りかちゃん力もちだし、はやくやれるわよ」

ともこ「うん、いいよ」

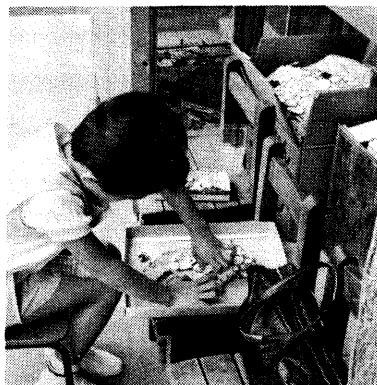
保「りかちゃん、ちょっとおねがい」

りか「ななに、せんせい」

保「ともちゃんが、なんだかいっしょにおてつだいやりましようって。せんせいも、りかちゃんも、ともちゃんにてつだっていたから、今たのんだんだけど、このタイルとあき箱のせいりおねがいできる」

りか「オッケー、おやすいごよう。まかしていて。ともちゃんやろう。ペペのペでやっちゃおうよ」と、(写真(9)(10))
もう内からあふれるエネルギーがりをうごかしている。

手のひらにハーッといきをかけたが、緊張ではないような表われだった。手先、指先は、がむしやりに、タイルの箱をパタパタたたいている。しかし、それをつかもうともせず、ぼんやり、がむしやら、という感じの表われをしていた。



写真(10)



写真(9)

ともこ「りかちゃん、やろう。どういうふうにやろうか」
りか「いれるんだよ。ぼんぼこやっちゃおう」と、この時も手先、指先は、宙にういて、口からただけが、前のめりになっていて、手先、指先には、力がいっていない、無気力さの表われだった。

ともこ「だめよ。どれがおもいか、おもいじゅんにいれなきゃ。おなじになるよ」
りか「そうだね。わたしとしたことが」
これで、ともこ



写真(11)

の出会いが、意識されたようだ。そして指先は、上衣のすそをぎゅつとにぎって緊張した。

りか「どうやろうか」といいながら、指でからだのよこを上下にこすって、緊張と不安を表わしてきた。

不安の表われはすぐに消えたが、

ともこ「さき、タイルはタイルにしよう」

りか「タイルの、大きい、ちいさいの、とわければどう」と、ともこの顔をのぞきこんだ。

(写真(11)(12))

ともこ「うん、それいいね」

このともこの言葉と同時に、りかの指先、手先は、力が適当にはいり、ピンとして、タイルの大きいのをつかんでは、横の箱にうつし始めた。(写真(11)(12))

ふたりは、十―十五分かかって、きれいにうつしかえてしまった。

入園以来、りかにしては始めての仕事、(長時間かかった)だった。

このあと、りかは、ともこに、

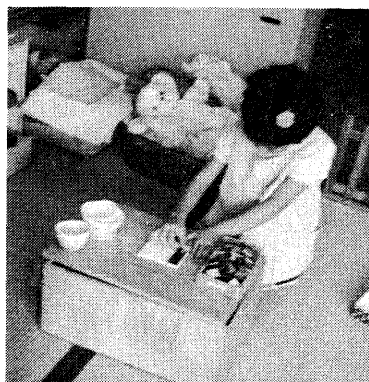
りか「これ、やさいとか、おかしとかにして、うりややろーよ。ままごとんともっていつてき」

ともこ「うん、いっぱいいくらかってね」

タイルのはいった箱を、力強くつかんでひきずり、ままごとコーナーに持ってきた。

この時の指は、これからやろうとする、うりやさんへの目的に向かって意欲をもやした指先、手先だった。かるくそろった指先は、よろこび(快、楽しさ)をかくせず、リズムカルに、ダンボールやタイルを、たたいたり、つまんでは入れたり、と動きまわっていた。

ママグトコーナーを、まず、ともこが整理し始めたのを見て、りかは、



写真(13)

りか「あっ、かたづけておみせにするんだね。いそがしくなったぞ」といいながら、おもちゃを分類したり、かさねたりしていた。

この時、おもちゃの取り落としや、あわててひっくりかえすことは、一回だけで、あとは、ちがう子どもの指ではないかと思うほど、生き生き、キビキビと動いている。

物をつかんでいる(写真⑬) 指先、手先に、命がかよい、目的に向かって動き、活動している快さ、力強さ、楽しさが伝わってくる(表われている)にはおどろいた。そして、私自身の目をうたがった。私の感情的見かたが、そう見ているのではないかと、何とも何ども、おちついて見なおして見たのだが、

やはり、力強く命の動きを伝えて来ているのを見た。

●子どもの自発性が、環境と一致して、本来の意味の遊びが生まれる

●その遊びに、打ちこんでいることが

大切(ぼつとうしている)

●打ちこんで遊んだことがから、次への発展を助けなくてはならない

こんなふたりのようすを(生活を)見つめて、

●内面からわき出るエネルギーを、その子の特性に合わせて、遊びとして形づけて、提供する(子どもたちが自由にえらびとれる形で、教師が、おしつけであたえるのではなく)この大切さを、いやというほど反省させられた。

●ひとりひとりが、集団の中で、可能性の中から力強く、次へ、次へと発展してゆくための遊びは、形だけの遊びではなく、内面的、まんぞくを味わっている遊びである。

これらを見きわめて、子ども(ひとりひとりの子ども)と共に、成長していく保育者になるのには、手先、指先が、一歩先に知らせてくれる表われを、もつともっと数多く見つめ、立体的、客観的、観察ができるようにつとめなくては、と強く感じるのだ。

(大田区立蒲田幼稚園)